

日西クラブ第60回定例会(2013/1/23)

「支倉慶長使節訪問時のスペインとヨーロッパ」

報告者：林貞男

1. 支倉使節の渡航目的(伊達政宗の指示)：

- 1) スペイン王室との友好親善・協力推進
- 2) メキシコ副王領と陸奥仙台藩との直接貿易要請
- 3) 陸奥仙台藩へフランシスコ会宣教師の派遣要請

2. 支倉使節の行程：

1) 日本からマドリッドまで：

石巻湾月の浦出港、日本人140人とスペイン人40人(1613/10/28、慶長18/9/15)→(太平洋3カ月)→アカプルコ入港→メキシコシテイ(1.5カ月、メキシコ副王と交渉)→ベラクルス出港一行30人 →(メキシコ湾1.5カ月)→キューバ(3週間)→(大西洋2カ月)→サン・ルーカル・デ・バラメダ入港→コレア→セヴィリア(約1カ月)→コルドバ→トレド→マドリッド(1614/12/20から約8カ月、フェリーペ三世拝謁、支倉使節洗礼)

2) マドリッドからローマまで：

マドリッド発(1615/8/22)→サラゴサ→モンセラット修道院→バルセロナ出港(9/5)→(地中海1カ月)→ジェノヴァ→チビタベッキア入港→ローマ滞在(10/25から2.5カ月、教皇パウロ五世拝謁、ローマ入市パレード)

3) ローマからスペイン出発まで

ローマ出発(1616/1/7)→チビタベッキア出港→(随員マチアスのみ故郷ヴェネチアへ)→フィレンツェ→ジェノヴァで支倉使節病氣→シエラ・ゴルダ(随員マルテイネス死去4/15)→(ソテロのみ別れてマドリッドへ)→セヴィリア(支倉使節病氣で残留)→サン・ルーカル・デ・バラメダ港(司祭2名及び日本人15名)年一回の定期船団で出港(6/22)

4) スペイン出発から日本帰国まで：

支倉使節とソテロ神父が定期船団でバラメダ出港(1617/7/4)→ベラクルス入港→メキシコシテイ(翌年3月まで滞在)→出迎えのサン・ファン・パウチスタ号でアカプルコ出港(1618/4/29)→(太平洋2カ月)→マニラ(1618/7月より約2年滞在、船はフィリピン提督が買上げ)→御朱印船でマニラ発(1620/7月)→長崎→仙台帰着(1620/9/20 元和6/8/24)。出発より約7年後。

注) 支倉一行のヨーロッパでの旅行・滞在及び大西洋復路航海等の費用については

各訪問先で供与を懇請した。何処も緊縮財政下であったため決定まで時間がかかった。
(セヴィリア参事会、スペイン王室、ローマ教皇等)

3. 支倉使節の交渉目的の背景：

1. 仙台藩にとってメキシコとの直接貿易を必要とする事由：

- a) 秀吉の奥州仕置きによる領地半減と転封で藩財政逼迫
- b) 家康の関ヶ原役前の約束(百万石復帰)は反故にされた。
- c) 外様大名は江戸城や駿河城の普請事業で莫大な出費を課せられた。
- d) 慶応の東北大地震被害は甚大(1611)。
- e) 鉄砲隊強化のための支出(堺の豪商今井宗久への支払い巨額)

2) 宣教師招来(西欧文明・技術による奥州の発展)と徳川禁教令との関連：

a) 最初の禁教令(1612/4/21、**使節出発の前年**)：

家康の駿府家老本多正純の家臣(右筆)岡本大八が有馬晴信から収賄した事件(兩名死罪)に関連し、二人がキリシタンだったことから駿府城内全員が調べられ多数のキリシタン信徒の存在が判明した。

改宗すれば問題なかったが、旗本鉄砲隊長の原主人(1500石)以下直臣14人は改宗を断り改易を受容れ、家康を驚かせた。

(正信の父、江戸家老の本多正信自身、嘗て三河時代の家康に反乱した一向一揆のリーダーだった。改宗して家臣に復帰した経緯あり)

上記処刑・改易の後、「徳川家直轄領」に対して禁教令が出された。

b) 全国禁教令(1614/2/1、**使節出発の翌年**)へと拡大した背景：

上記裁判は駿河の大久保長安(徳川幕府直轄領の総代官兼金山奉行)が担当したためか本多側にとって厳しい裁きだった。当時の徳川家臣団上層部は過去に功労のあった武功派(トップは大久保忠隣)と現在の行政に手腕を発揮する吏僚派(トップは本多正信)とが対立していた。

1613年8月大久保長安が病死すると、今度は本多正純が巻き返しに出て、長安の屋敷が徹底的に調査された。その結果蓄財70万両、外国人キリシタンとの交信多数、謀反の証拠等々が発見されたとして長安の子息7人全員が切腹処分となった。

禁教令は全国へと拡大された。(大阪冬の陣対策でもあったという)

c) 大久保長安→松平忠輝→政宗との関連が疑われた背景：

上記に加え長安のスポンサーである大久保忠隣(小田原城主)は改易処分となり小田原城は没収された。

更に元和2年(1616)家康死去の3カ月後 家康六男の松平忠輝(越中高田60万石)が改易処分を受けた。忠輝の幕府付け家老は上記長安であり、政宗の長女は忠輝の正妻だった。政宗の財政担当鈴木元信は金銀鉱山開発精錬等で長安と緊密だった。

d) 徳川幕府は禁教令以外にも種々の理由を挙げて大名の改易・廃絶を続けた。

外様大名	一門大名	譜代大名
家康時代： 25	2	12
秀忠時代： 21	1	14
家光時代： 26	1	15
家綱時代： 13	0	13
綱吉時代： 17	4	28

6代將軍以降は緩和されたが、更に46家の廃絶・削減が行われた。
合計240家であり、幕末を除けば大名も家臣も戦々恐々だった。

4. 家康のメキシコとの直接貿易に関する交渉

家康は代々のフィリピン総督に対して「朱印船貿易の拡大」や「メキシコへ向かうフィリピン船の関東立ち寄り」や「メキシコとの直接貿易」等の要請をしていたが何れの総督からも確たる回答は無かった。

1608年臨時総督に着任したロドリゴ・デ・ビベロはフィリピン船を始めて浦賀へ立ち寄せ、「今後は関東の何れかの港へ寄港させる」旨の返書を家康・秀忠宛に届けさせた。家康は喜んだ。

翌1609年7月メキシコへ帰国するロドリゴの乗船が嵐で千葉県岩和田沖で座礁遭難した。数十名の死者が出たが残りは漁民に救助された。

ロドリゴは江戸の秀忠と次いで駿府の家康と面談し下記三箇条の請願書を提出した。

- 1) 宣教師の保護
- 2) スペインとの友好親善
- 3) 日本にいるオランダ人を退去させる

家康の文書回答は1) 2) は了承。3) は「既に滞在許可を与えている。今直ぐは困難」とされた。また口頭で「鉱山精錬技術の供与」を要請した。

ロドリゴのメキシコへの帰国船は幕府が伊東で英人アダムス(三浦按針)指導下で建造した120トン船だった。日本人商人22名も乗せ1610年8月1日出発した。(この船はメキシコで売却され日本へ送る商品と交換)。日本人商人を送還する船にメキシコ副王の答礼使としてセバスチアン・ビスカイーノが乗船し浦賀に着いた(1611年6月)。ビスカイーノが秀忠に面会した際の通訳はフランシスコ会のソテロだった。ビスカイーノは修道院に向かう途中で政宗(江戸城修築普請中)に会い、政宗からスペイン火砲の試射を所望された。

ビスカイーノは11月政宗の許可を得て奥州沿岸の測量を終え、翌1612年金銀島の探索に出掛け嵐に会い船が大破した。ビスカイーノの船に随行予定だった幕府建造の新規大型船(約400トン)も浦賀沖で座礁し大破した(1612/11月)。この船で仙台藩家臣2名もメキシコへ渡航予定だった。

徳川幕府と政宗との間で急遽打ち合わせがなされ、ビスカイーノの指導下で幕府の船奉行も協力し仙台藩でガレオン船(約400トン)を建造することになった。この船がサン・フアン・パウチスタ号(注)である。

注) 竜骨の組み上がった日にその日の聖人を守護者として船名が付けられる。
サン・フアン・パウチスタは6月24日の聖人である。

5. 支倉使節の交渉経緯

1) メキシコ副王：

交渉は進展を見なかった。

背景：王令によりスペイン植民地は外国との直接貿易が禁止されていた。加えてビスカイーノからも「幕府がキリシタン禁教令を出した」と報告されたため

。

2) スペイン国王フェリーペ三世：

進展もあったが、疑義も提示された。

支倉使節関連の王室顧問会議から王への答申は少なくとも10回は提出されている。

前半7回：1614/10/30、11/22、1615/1/16、3/2、4/29、6/4、9/15

後半3回：1616/3/10、4/16、6/16

背景：王室インディアス顧問会議には支持派(フランシスコ会)と反対派(イエズス会)と双方の意見が存在した。王室側近の最有力者は和平派のレルマ公(王代理職)であ

りフランシスコ会にも理解があった。

(王代理職権限の保持者は1615年10月に好戦派ウセダ公へ交替されている)

支持派は「政宗は奥州の有力な王であり、キリスト教宣教を歓迎している。支援の意味で或る程度のメキシコ貿易を受容してもよい」と主張。

反対派は「政宗は日本全体を代表しておらず、徳川の意向には逆らえない筈。徳川は既にオランダとの通商を許可している」と主張。

フェリーペ3世の裁定は「仙台藩がキリスト教を歓迎するなら年一隻程度の貿易は認めても良い。但しオランダ船を日本が受け入れないことが条件」であった。

文書はローマからの帰途に手交することとされた。

3) ローマ教皇パオロ五世：

格別の進展は無かったが非常に手厚い歓迎で受容られた。

背景：教皇に対してスペイン王室より「スペイン王室の決定に影響するような発言は慎んで欲しい」との意向が文書で通達されていた。

4) フェリーペ3世(ローマからの帰途)：

状況が変わっていた。王室会議では「ソテロ神父のみマドリッドへ立ち寄るべし、支倉使節はマドリッドに寄らず直接セヴィリアへ向かうこと」とされた。また「仙台藩には年一回のメキシコとの直接貿易を認める」という文言は削除された。

「仙台藩へ宣教師を派遣する」との文書も支倉使節への交付は見合わせられた。

「フィリピン総督が日本での禁教令以降の状況を確認後、現地で手交」とされた。

背景：支倉使節の日本出発以後に出された幕府の全国禁教令(1614/2/1)についての報告が複数のルートでマドリッドへ届いていた。

また欧州の情勢が緊迫してきたため、和平派のレルマ公から戦闘派のウセダ公に権力(王代理職)が移転した(1615/10)ことも影響したと思われる。

6. 支倉使節渡航中の日本及び仙台藩関係の主な出来事

1614年

全国禁教令(2月)

高山右近マニラへ追放(11月)

大阪冬の陣(12月-1月)

1615年

政宗庶子秀宗、宇和島10万石受領

大阪夏の陣(6月-7月)大坂落城・豊臣家滅亡

スペイン国王の訪日使節サンタ・カタリーナが浦賀着(8月)

1616年

家康死去(5月)

松平忠輝改易され伊勢へ配流。五郎八姫は実家へ戻される(8月)

サンタ・カタリーナ使節離日(9月) 家康にも秀忠にも会えず浦賀で軟禁状態だった

1617年

政宗適出子の秀宗が秀忠養女と婚姻

7. スペイン歴代王室のヨーロッパ・地中海・新大陸での政策展開：

1) イサベラ女王(夫のフェルナンドはアラゴン・カタルーニャ・ナポリの領主)：

レコンキスタ完成、ユダヤ教徒追放、コロンブス新大陸発見とトルデシージャス条約、フランス包囲網(娘の嫁ぎ先)：ポルトガル、ブルゴーニュ、オーストリア、英国

2) 神聖ローマ皇帝カルロス五世(フアナ女王の長男。在位1516-56)。

スペイン、ブルゴーニュ、オーストリア・ハンガリー、ドイツ及びナポリの領主。
戦争対戦相手国：フランス(7回)、オスマントルコ(4回)、ローマ、ドイツ、オランダ等。

新大陸ではコルテスによるアステカ帝国征服とピサロによるインカ帝国征服が行われそれぞれの地で大鉱山が発見された。

ペルーのポトシ銀山(1545)とメキシコのサカテカス銀山(1546)。

またマゼラン・デルカーノによる世界一周航海を実現させ、胡椒香料を持ち帰った。
当然ポルトガルとトルデシージャス条約に係わる紛争が発生。

太平洋を新大陸へ戻る(東へ向かう)航路がなかなか発見できなかったこと、及び欧州戦費が緊急に必要なことから香料諸島に関する権利をポルトガルへ売却した(サラゴサ条約1529)。

この条約によりトルデシージャス条約で不明確だった太平洋での両国勢力圏の境界(子午線)を確定した。この子午線が日本を横断していたため、後日布教権の問題が発生。

宗教関係ではローマ教皇のフランス寄りを譴責、兵士のローマ略奪を黙認(1527)。

またロヨラやザビエルが反宗教改革目的で設立した(1534)イエズス会を支持した。

イエズス会は従来の托鉢修道会と異なり、貿易や不動産ビジネスも行った。

神学のみならず語学、数学、自然科学、哲学、社会科学、音楽絵画等の学問教養を重

視し、教育研修のため多数の学校を建てた。

欧州関係ではイタリア覇権をフランスと争い、オーストリア・ハンガリー帝国の東側から圧力を掛けてきたオスマントルコと闘い、ドイツのプロテスタント諸侯とも戦ったが劣勢となり、退位前年にはアウクスブルク帝国議会でプロテスタント諸侯の権利を承認せざるを得なかった。

退位の際、ハプスブルグ帝国を分割した。長男フェリーペ二世にはブルゴーニュ・スペイン・ナポリを譲渡、実弟のフェルディナンドへはハンガリー・オーストリア帝国とドイツ神聖ローマ帝国を譲渡した(実際には1520年代以降は任せていた)。

在位末年の国家財政状況は借金がかさみ5年先までの歳入が担保に入っていた。歳入の65%が長期国債の元利返済に消える惨状だった。

3) フェリーペ二世(30歳で即位、在位1556-98) :

結婚四度：最初はポルトガル王室から、二人目は英国女王メアリー、三人目はフランス王室から、四人目はオーストリア・ハプスブルグから姪を迎えた(1570)。51歳にして長男フェリーペを得たが(1578)、王妃はその2年後に死去した(1580)。

首都はトレドからマドリッドへ移転(1561)、更にエル・エスコリアール宮殿を建設(1563-84)。完成の年にイエズス会士の引率する天正少年使節を謁見した。

スペイン国内のイスラム教徒にキリスト教への改宗を強制したため反乱が起こった(1568-71) 反徒はスペイン各地へ強制移住させた。

スペインの異端審問裁判ではユダヤ教徒、イスラム教徒及びプロテスタント新教徒が対象となり150年間で約5万人が訴追された。このうち約1%、500人が火刑となったという。

自領のブルゴーニュでもカルヴァン派プロテスタントを弾圧したため(異端審問裁判所を導入し、重税を徴収) 現地貴族とも対立し、エグモント伯爵を処刑(ベートーベンのエグモント序曲)。 ついにオランダ独立戦争へと発展し80年間の長期消耗戦を招いた(1568-1648年)。この戦費総計は新大陸からの王室収入総計を超えた程で、スペインにとり最大の問題となった。

反乱鎮圧のため陸軍数万人を派遣し常駐させるが戦線は一進一退(フランスやイギリスがオランダを支援し続けたためでもある)。

ブルゴーニュ公領の内、ネーデルラント北部7州はユトレヒト同盟を結成し、独立(オランダの起源)

ネーデルランド南部ではカソリックのアラス同盟を結成させた(ベルギーの起源)

メキシコ副王領ではフィリピン諸島から太平洋を東へ渡って戻る航路が、多大の費用と犠牲者を出した後、ついに発見され植民地化が開始された(1565)。

(大型遠征隊派遣は1521, 25, 27, 27, 42, 64の6回、毎回3-7隻、110-450人で多数の犠牲者が出た)

また両副王領では低品位の鉱石でも処理可能なアマルガム精錬法が開発され、銀の生産量は大幅に拡大した。生産の最盛期は1600-1620年で、1630年代に入ると急減した。また生産量全体ではペルーが2/3、メキシコが1/3だった。両副王領からスペイン本国への輸出金額の約90%が貴金属だった。

その他の対外関係：

フランス：カトー・カンブレージ和約が成立(1559)、ミラノはスペインの領有となり長年のイタリア争奪戦争は終わった。

英国：エリザベス女王と敵対し、スペイン 無敵艦隊”が大敗(1588)。(出発直前に海軍提督が急死し海軍経験のない貴族が艦隊司令官に任命される不運もあった)

オスマン・トルコとの戦い：スペインは地中海とアフリカ北岸で、オーストリア・ハプスブルグは東欧で戦ったが、フランスはトルコと連携作戦をとった。

スペイン・ヴェネチア・ローマ教皇の同盟艦隊は地中海東部レパントの海戦で勝利した(1571)。しかしトルコは直ちに艦隊を再建しアフリカ北岸はトルコ領有が続いた。

ポルトガル併合：青年国王セバスチャンが二万の軍隊で自らモロッコに攻め入り大敗、行方不明となった(1578)。老年の後継王(修道院長)が死去すると(1580)、フェリーペ二世はアルバ公軍隊に侵攻させポルトガル抵抗軍を粉砕した。ポルトガル王位を獲得後当初は温和な政策を採ったが、後半は重税を課したためポルトガル民心は離れた。

特に従来ポルトガル港へアジア産品を買付けに来ていた(従ってポルトガルの収益源だった)オランダ船とイギリス船の入港を禁止したため(スペイン港及び植民地港にも適用)、オランダやイギリスは東インド会社を創設し直接アジア貿易に乗り出すことになった。これはポルトガルの既存経済権益を非常に弱めた。

国家財政：国家破産宣言5回：1557、1560、1575、1596、1598

長期国債残高は歳入の8倍へ増加。たびたびの国家破産はスペインの重要産業である羊毛取引や金融取引に破滅的打撃を与え、国内産業衰退の原因となった。

4) フェリーペ三世時代 (即位時20歳、在位1598－1621):

A. 個人的環境:

誕生時(1578)、父フェリーペ二世は51歳。2歳にして母(王妃)死去(1580)。6歳からの教育係は司祭ロアイサ(後のトレド司教)が担当、興味科目は外国語と幾何。15歳から王室顧問会議(分野別の14会議)に出席。17歳で父(68歳)の代理職となり毎晩側近からのアドバイスを受けた(Junta de Noche)。21歳で父フェリーペ二世死去に伴い即位(1598)。

父フェリーペ二世は終日全ての文書を読み決定し署名する習慣だったが、三世は戦闘指揮も外国遠征も全く経験がなかったので側近実力者レルマ公の意見を聞いた。

また国家歳入の8倍の債務を残されたため年間予算の50%以上が元利返済に消えた。

B. 国内関係:

a) 財政収入増加対策:

種々の新規増税を課してもならず、貨幣改悪に踏み切った(銀分を銅で代替)(1599)。その結果インフレが昂進しすぎて国内経済が混乱。国家財政の破産宣告(1607)を行い、年間予算相当2,000万ドウカードの返済を停止し、フーロ(長期の年金払い債権)と交換した。そして貨幣改鑄を停止した(1608)

b) ペストが流行し(1596－1602)、人口約800万人の1割が減少。国家経済が沈滞した。

c) 宮廷を一時的にバヤドリッドへ移動した(1601－06)

d) 国内在住イスラム教徒モリスコが再び反乱の気配を示したので(オスマン・トルコとの連携があった)、国外追放に踏み切った(1609－14)。総計約30万人の農業専門家の追放はスペイン農村の荒廃と生産力低下をもたらした。 (支倉使節は馬上から荒廃した状況を目にした)

e) レルマ公のリーダーシップによる和平政策とその転換:

オスマン・トルコ挟撃作戦を断念(1601)、英国との和平条約(1604)、反徒オランダとの屈辱的休戦条約(1609)、フランスとの和平条約(1611)等の和平政策を推進した結果、スペイン王室内貴族の間で「レルマ公は弱腰すぎる、カソリックの強固な信念に復帰すべき」という不満と議論が次第に強まってきた。これらの人々は和平派レルマ公から権力を好戦派ウセダ公へ移すべきと画策し、王代理職の交替に成功した
(交替した1615年10月は支倉使節がローマへ到着した月)。

やがてウイーン・ハンガリー帝国でプロテスタントの反乱が勃発するとスペイン王室はウイーン・ハプスブルグ家への支援・派兵を決定する(30年宗教戦争1618-48)。レルマ公は顧問会議を辞職し(1618)、宗教職の枢機卿に転じた

文化面ではセルバンテスの「ドン・キホーテ」前篇(1605)や画家グレコ(1614没)の時代。

C. 対外関係：

- a) 最大の課題であったオランダ戦争は当初継続されたが(1599-1612)、スペイン財政が枯渇したため停戦交渉に入った(1607-08)。
「自国領土ブルゴーニュ内のプロテスタントの反乱反徒を正式相手として条約を結ぶ」についてはスペイン内で反対も多かったが「12年間に限定した一時的休戦」として「オランダ連合共和国との休戦条約1609-21に踏み切った。
(支倉使節が滞在した1614-17は丁度休戦期間だった)
- b) ペルシャから「東西でオスマン・トルコを挟み撃ちしたい」と同盟の申入れがあったが、スペインは「目下オランダ戦で手一杯」として大使を派遣し丁重に断った(1601)
- c) ポルトガル政策は更に徴税を強化。スペインに在住したポルトガル貴族を王室から追放し、従来ポルトガル人が原則だったポルトガル行政をスペイン人を派遣し交替させた。この措置は非常にポルトガル人の反感を惹起した。
- d) 英国：独身エリザベス女王が死去。王位継承順位によりスコットランド王のジェームズが英国王(ジェームズ一世)を兼ねた(1603-24)。英国史上で初めてスコットランドとイングランドが合体した。ジェームズは王権神授説に基づき議会を無視して増税・軍事費調達を強行しようとしたため、議会の国教会派まで敵にして対立状態となった。このため戦費調達は進まず、英国内では国教会派、非国教会派の長老派ピューリタン、カソリックと三派が鼎立状態になり後日のピューリタン革命の素地となった。
オランダ独立戦争が長引きオランダの毛織物工業が不振となったため、羊毛の輸出国だった英国に大規模な毛織物工業が発展し、産業革命の先駆けとなった。また最大の国際港だったアントワープが独立戦争で機能停止状態となったため、代わって英国海運業が発展した。(後日の航海条例と英蘭戦争で英国勝利の原因)
- e) フランス：
8次にわたるユグノー戦争(1562-1587)でフランス国内は荒廃。バロア王家の男子後継者4人兄弟が次々に亡くなり、プロテスタントのナヴァール王(アンリ4世)がカソリックに改宗してフランス王となった(ブルボン王朝の初代)。
新旧両教徒間の争いに終止符を打つべく「ナントの勅令」(信教の自由)を宣言し(1598)、同年、スペインとの争いもベルバン条約で和平した。
アンリ4世は信教よりも実際政治優先でオスマン・トルコとの協調政策をとり、ドイツ・プロテスタント支援に出陣する直前に暗殺された(1610)。

遺児ルイ13世はまだ幼く、摂政の母親(カトリック)はスペインとの友好関係を望んだのでスペインとフランスとの間で婚姻和平条約が締結された(1611) :

f) ローマ教皇と日本布教権 :

トルデシージャス条約でもその後のサラゴサ条約でも太平洋上の両国勢力圏の境界子午線は日本を縦断している。従って地理学的には西日本布教はポルトガルに、東日本布教はスペインに属することになる。アジアへの布教はポルトガル王の支援を得たイエズス会が先行したので、フィリピン諸島にスペイン植民地ができ日本との貿易が始まって(1575)、暫くはこの点が問題になることはなかった。

しかし1580年にスペイン王がポルトガル王を兼任するとこの問題は複雑になった。先に手を打ったのはイエズス会で天正少年使節をフェリーペ二世に会わせ(1584)、且つローマ教皇グレゴリウス13世から「日本布教はイエズス会に限る」との勅令を取得した(1585)。

明確になったイエズス会布教権に問題が生じたのは秀吉の禁教令(1587)である。イエズス会の長崎領有が秀吉を怒らせた原因とも言われ、他の修道会(特にフィリピン経由の托鉢系修道会)は積極的に訪日した。

また新たに選ばれたローマ教皇パウルス5世(在位1605-21)から「日本布教はどの修道会でもよい」との勅令が出された(1606)。

(パウルス五世は支倉使節のローマ訪問はこの勅令の結実として非常に喜んだ)

更にサラゴサ条約の子午線が日本を東西に分けていることが後日判明すると「日本司教区を東西に分けて欲しい」との要望がフィリピン植民地の修道会から出された。

ソテロ神父の動きはこのライン上にあると見れば理解しやすい。

尚 イエズス会のマテオリッチは中国布教長に任命され1601-10まで北京に滞在した。明の万暦帝に仕え西欧の理数科学文献22種(数学・幾何・測量・天文学・光学・力学・医学・薬学・軍事学・世界地図等)を漢文に翻訳し出版した。マテオリッチの次の中国布教長ロンゴバルデイはローマ教皇パウルス五世に面会し(1615)、天文学者2名の紹介を依頼し中国へ連れもどった。明の崇禎帝は暦局を設立しイエズス会士を採用。清朝でも康熙帝・乾隆帝は天文台長や大砲製造所長にイエズス会士を任命した。またロシアとのネルチンスク条約交渉では顧問を依頼し中国側に有利な条約とした。フランス科学アカデミーの最新情報は最新版が絶えず翻訳出版されていた。

g) オーストリア・ハプスブルグ神聖ローマ帝国領(ドイツ) :

アウクスブルグの和議(1555)でプロテスタント諸侯の権利が認められたが、その後ドイツでは皇帝側及びカソリック諸侯の激しい巻き返しが進んだ。またプロテスタントもル

ター派諸侯だけでなくカルヴァン派諸侯の勢力も浸透していた。戦闘性を高めた皇帝側の動きを警戒し、プロテスタント側諸侯の多くがプファルツ選帝侯を盟主とした「同盟(ユニオン)」に結集すると(1608)、カソリック諸侯はバイエルン公を盟主として「連盟(リーガ)」に結集した(1609)。

一触即発の状況下、ベーメン(ボヘミア)でプロテスタントによる小反乱事件が生ずると(1618)、たちまち大なる報復の連鎖となってドイツ全土に波及した。

スペインでは好戦派のウセダ公に権力が移行していた。オランダとの休戦期間終了も近いことから、アルザス地方の領土獲得を交換条件にオーストリア皇帝の要請に対して軍隊派遣を了承した。フランスはオランダ、イギリス、デンマーク、スウェーデンの反ハプスブルグ諸国を順次参戦に踏み切らせ、30年戦争(1618-48)が始まった。

ドイツは全土が荒廃し人口の25%から30%が失われたという。

この全ヨーロッパが参加した戦争は最終的にハプスブルグ・オーストリアとスペインの惨敗に終わった。オランダ連邦共和国は国際的に承認され、カタロニアの反乱(1640-52)は制止出来たが、ポルトガルの反乱は抑止できず分離独立となった。

支倉使節一行の訪欧は丁度この悲惨な大宗教戦争が始まりかけた一触即発の緊張の時期だった。フェリーペ三世の逝去(1621)はオランダとの休戦期間が終了し戦争再開の年だった。

8. スペインの植民地貿易政策(対ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス)：

A. 大西洋貿易の展開：

- 1) 新大陸インディアスで発見した富の分配比率：発見者80%、王室20%(1495)
- 2) インディアス通商院設立。セヴィリア商人の新大陸貿易独占体制確立(1503)
- 3) インディアス最高顧問会議設立(1511) 新大陸の政治・経済・軍事・司法を所管
- 4) 副王派遣。メキシコ(1535)、ペルー(1543)
- 5) 護衛艦隊付き大西洋定期船団システム確立(1564)

メキシコとペルー夫々40-50隻(毎年各一回)、キューバで護衛船8-10隻に合流。

単独船による航海は禁止(英仏蘭の海賊対策と密輸防止のため)。

全期間を通じてみると積荷の約5%程度が奪われた。

B. 太平洋貿易の開発と制限：

- 1) フィリピン植民地設立(1564) メキシコ副王に所属
- 2) ガレオン貿易開始。メキシコ/マニラ(1571)、ペルー/マニラ(1581)
- 3) 植民地貿易の制限：
 - a) アジア貿易の急増：

フィリピン経由でアジア産品(絹製品・陶磁器・銅・工芸品等)の両副王領への輸入が始まると、対価の銀のアジア向け流出が急増した。従来アジア品はポルトガル商人によりインド洋/アフリカ沖合経由でリスボンへ運ばれ、次いでセヴィリア独占組合へ運ばれ、大西洋を渡って新大陸へ運ばれた。このルートの価格はフィリピン/太平洋ルートの約10倍だった。

アジアへの銀流出は急増し1597年には本国向けを超えた。

b) 貿易制限：

スペイン王室にとっては新大陸植民地からもたらされる王室取り分の貴金属が王室年間歳入の約20%－25%に相当した。これが減ることは重大事であるため両植民地とフィリピン(或いはフィリピンを経由しない直接アジア各国)との貿易制限に踏み切った。セヴィリア商人組合にとっても取り扱い貿易量が減ることは痛手であり、王室と同様に新大陸とアジア間の貿易を制限するようインディアス顧問会議へ要請した。

制限はルート、商品、金額、数量、配船隻数など種々の方法で行われた。

支倉使節がメキシコ副王領との直接貿易を志向して渡航した時はフィリピン経由も直接貿易も下記のように制限令が始まっていた。従って非常に困難な状況下にあった。

c) ルート別貿易制限令の開始年次：

マニラ/中国等アジア(1585)、メキシコ/マニラ(1591)、ペルー/マニラ(1597)、ペルー/メキシコ(1604)。制限令は何度も出され次第に厳しくなった。

家康が政権を掌握した1600年には既にフィリピン－メキシコ間貿易及び植民地と外国との直接貿易には制限令が出ていた訳で、支倉使節の直接貿易交渉は実現不可能な状況だった。

。

9. 支倉使節仙台藩帰国後のこと：

支倉帰着後直ちに仙台藩はキリスト禁教令3カ条を高札掲示した。

- 1) キリスト教は棄教のこと。棄教せぬ場合武士は追放、百姓町人は死罪。
- 2) 信者かどうか不分明の場合、証拠を発見したものには褒賞を与える
- 3) 宣教師は領内から退去のこと。退去できぬ場合は棄教のこと

政宗は支倉帰着10日後に面談、以後も時折り。2年後に支倉病死(1622/8/7)

10. 支倉使節派遣の意義：

1) 従来の評価：

支倉使節の派遣については「失敗だった」「始めから期待されていなかった」「宣教師にだまされた」「徒労に終わった」等々の否定的見解がある一方で、「困難な中で粘り強く交渉した」「堂々と仙台藩を代表し主張した」等々積極的な見解もある。

またキリスト教の立場から「洗礼を受け最後まで棄教しなかった」という見解と「貿易交渉のため手段として受洗した」(遠藤周作著「侍」)という見解もあり、必ずしも一致していない。(尚「侍」の記述の中で「フェリーペ三世に会えなかった。帰国後伊達政宗にも会えなかった」という点は事実と相違している。小説だから構わないのかも知れないけれども)

2) 事実に即した見方：

徳川直轄領の禁教令に対抗する仙台藩の試みは「全国への禁教令拡大」と「幕府によるオランダ貿易促進」という何れも当時のスペイン王室にとっては受容れ不可能な条件の前に実現を阻まれたと言える。

支倉使節の責任でも伊達政宗の責任でもなく、当時の徳川家日本とスペイン王室の置かれた状況と採られた政策に原因があり、支倉使節の努力によって解決され得る状況ではなかった。

3) 明治の発見：

明治4年出発し欧米を回覧した大型使節団(岩倉具視・木戸孝允・大久保利通等)は欧米文明の高さに驚いた(最初のサンフランシスコで先ずホテルのエレベーターに驚く)。

イタリアで約260年前の支倉使節(常長でなく長経を使っていた)文書を見せられた時は信じられなかったと言う。

帰国後の明治7年早速キリシタン禁教令を廃止し、明治9年天皇の東北巡幸の際に、仙台藩へ要請し「キリシタン関係機密文書」が初めて開示された。政宗は重要文献として徳川の厳しい禁教令の下でも廃棄せずに保存を命じていた(現在は国宝)

4) 文書に表れない政宗の期待と成果(私の見方)：

A. 政宗が支倉に依頼した西洋文明の技術見聞：

大船の造船術と航海術：政宗は大金を投じて自藩でサン・ファン・パウチスタを建造した。そして同船は太平洋の2回往復に成功した。この間に家臣は造船術と大洋航海術のかなりを習得したであろう。(幕末に太平洋を往復した咸臨丸は外国で建造した輸入船である)

更に支倉使節は大西洋の往復航海で嵐にも何回か遭遇しているから、多数帆船による船団編隊での大洋航海術も深めたであろう。

また護衛艦隊の訓練を何度も実見し、**海上の交戦術や砲術**も学んだであろう。

築城・築港・建築術：キューバのハバナやメキシコのヴェラクルスには当時世界最大の要塞があり、海賊対策の訓練は殆ど毎日行われた。従って要塞の築城術や大砲の操作方法も学べたであろう。

金属精錬技術：メキシコへの途中でタスコ(銀鉱)によっており、水銀アマルガム法の実験現場を見学した可能性がある。

上記はほんの一例だが支倉使節は当時のスペイン(セヴィリア、トレド、マドリッド、サラゴサ、バルセロナ等々)と植民地で、またチヴィタヴェッキアやローマで建築術や**水利灌漑術や軍事技術**のかなりを見ている。

これらは帰国後政宗に報告し詳細な質疑応答があったであろう。

政宗としては直接貿易や宣教師派遣が実現しなくても、自分に代わって支倉が当時の西欧文明の実際に触れ、最新の技術や国際情勢を良く見てきて報告してくれるようにと指示したのである。

或いはこれが最大の目的であり期待だったかも知れない。

もしそうであれば支倉はその期待に十分応え、政宗は大いに満足したと思われる。

但しこの期待に応えるためには使者の人物と資質と経験が要求される。

メキシコのみならずスペインへも渡航するとの変更が為された時点で、家臣の中の誰が最適かを真剣に検討したのである。

政宗人選の最初の候補が鉄砲隊長水沢領主3000石の後藤寿安だったことから十分首肯される。彼がイエズス会所属でなければ当然選ばれていたと思われる。

しかし通訳兼代表がイエズス会に対立するフランシスコ修道会厳修派のソテロ神父であってみれば、この案は断念せざるを得なかった。

寿安が自分に代わる人物として、隣接の胆沢郡小山領主で鉄砲隊組頭の支倉常長600石を推薦したことは容易に推察される。

政宗は若き日の支倉を何度も敵状前線視察や情報収集で使った経験があり、また敵陣内に潜入し内応人物との機密連絡をも任せたことがある。余程の信頼感が無ければ任せられない仕事である。

残念なのは仙台藩医の大槻玄沢(「解体新書」の杉田玄白の弟子)が仙台藩書庫の虫干しの日に見たという「支倉使節の渡航中の日記20巻」がその後紛失してしまったことで、政宗はこれを時折り繰り返し読んでであろうと私は想像する。

当時の西欧文明を見聞した支倉使節がどのように感じたかを是非知りたいものである。

明治4年に出発した岩倉使節団の「米欧回覧実記」以上の感銘を呼ぶのではなかろうか。

以上

追記：

支倉使節の下記経歴はその重要任務にふさわしい。

1) 18歳－21歳：

大崎・葛西攻めに当たって敵方の重要人物(政宗方への内応者)の所へ政宗の意向を伝えるよう派遣されている。また南部領攻撃でも前線視察と情報収集に派遣されている。(スペインやローマとの交渉及び情報収集の観点からも信頼し得る人物)

2) 22歳：

朝鮮征伐では政宗の旗本御手明き衆(20人)として渡海。航海の経験あり。

3) 26歳：

7歳で養子に入った本家で実子が誕生したため、胆沢郡小山に600石分与され、38歳の再検地調査でも安堵されている。渡欧前の支倉使節は鉄砲隊の一つの組頭。鉄砲隊長は胆沢の隣り水沢の領主3000石の後藤寿安だった。

(彼はイエズス会の奥州信徒代表、治水にも熱心で寿安堰を築いた)

政宗から最初に使節を打診された際、本件はフランシスコ会(ソテロ)ルートだから自分は不適と断った模様(イエズス会アンジェリス神父のローマ教皇宛年次報告書)

。

尚 ソテロ神父の政宗への最初の紹介者は後藤寿安だった。

当時鉄砲・治水・鉱山等の先端技術は宣教師がもたらした。